河海抄

東屋　浮舟

十九

へ利12
1272
19

特
へ12
1272
19

河海抄巻第十九

正六位上物語博士源惟良撰

第三十三　東屋　四阿

巻名

つくは山をはやましけ山のしけりまてあなかちに思ひいらむも

はしたなくおもひいてゝまとひたまふへきかなとゝ

筑波山ハ山しけ山ハしけゝれと思ひ入にはさはらさりけり

かミのこゝろ

守子　是ハ常陸介也　太守者為親王任之親王任時不知吏

務仍以次為守乃令執吏務之此故ニ乃介を守とも

いへる又當國并凡人任時ハ大守守より任する例もある也

裏書云　常陸上野上總國ハ親王任國諸王ハ受其遷任するなり

こともゝ女又六人ありけれハ

次く〳〵とといふに同じ心也。或過て
なかことなどさせてもと同事也
さゆくまくろかく　賦
やくいふうらなとあれは　沈
ひとこ乃くちるをなど
好事者募以纏帛　孝経
とこしゆとゆくう庭ゆかく　近也
かう定乃あかり　豪散
うゑまてうら合ちらり　あさかうちん　なかし
勝負　詩合　花合　庚申
ゆこ息石てん　蒔絵　螺細
なほさつゆ行いはくうらかく
そ流さ礼たのもこ了結なり

まさなかりなさらもむくるもいかうひとてほとつ
ひさこ徳いちとゆらみゆりとて絲ちろをところ
事ふうひくらりかく
内教坊　女楽事　別当大納言中将ちかく人補之也
くゆり庭ゆるまち　くれ花年とみへて　師也
百秋楽よ内教坊説こいふのありありやうま
曲乃花ちく六帖のうえ　春引説
十三掌曲琵琶成　名ハ属教坊第一部　琵琶ハ
内教坊の琵琶の女楽師和漢の古事有ちんある
何こなは廻かし行てりしるみ記ろう
吾子　日本記　我子　阿子　家子
ちかくあんと　ちしとかくイフ　日本記
かんのわかかれ　守こ也

何のかしこいふ卿しけく何せ大殿ゆもむもなはつの
むしの花人みくいまいらりしるしを多あり
ともいふうち濃　ち
こゆかしのけるく　東宮君
らるれけるく　内大臣のくるり
てよ何か宣あるにて　如指示
掌上珠といふ袖や　掌ハタナゴコロナリ
りなれこみくみてそまつりしゝ
高家子
まんまらは家子（長実）こころす思ひこてはけれんどこそかいつ
すふけんせうもくらうやうはれうちたらん始りまいれ
けうちそとふ待てとまうあや
海ふ語のはこてすこやうなれと

あたらふ方はりこといふんせ文ちかくいはうさらりれ
けとやうもとしふてのちち宏守かことくにはふ家
御らとそのんりそなりしいこゝにふるのあまかいとゝも
まれ人のけりまさせ　雅人　諸史也
次れうてわまうのるうに
女婿（メノワラハ）　延喜式　女童（メノワラハ）　兒毛（コモ）　万葉
らい年に従五位下りけるんこゝをものいこうハ
今屋（コヤ）　日本記　[illegible]
れうこのれうらけりにて行つるあり
こて得ふいこら行せれいこら始やてよら文言通故也
知るもゆうかくみく　鵠妻　みゆ中知うら　枕草子
大臣よるかしむくらうそこくみゆう
續芳　云記（ちり）権大納言兼献續芳中宮にく

かくこゝろをつけらるゝ。ならひ入事也
あこかれやう人とむしえんわらし給ふか。
教坊楽記云　十一君（集）氣裝人十二君傾相人
えらせさる所ハさしもあらはしや
用武家
あふぎ
何なくハ　要奥やおくふり開ておきてしきたる
ゐなくゝりかくも
ちさりきんくハ給ふさ七五の
そもかくゆよりハ知
紫のうすもの梅よしさし野く
うちの（後巻）由漆氣ありしこれも
通なる人のふところ紙のおやうまおでも媚ぬ給へ

又婚なるつうくもそハおもたく人もなき
世中ハ青わやはしりきん彼身ゆかうつ風もたに浮
人のおつ彼身のくつの紙ぶかく宝せとて浮流
岩さかし松ハ
人非木石皆有情　白氏文集　心非木石　接仙人
乎あれハ紙ましうかんそうぞ
無せしこゝろまし川はせてみるさ
見しへのゝたるかハ身かうつて無きせ寄せぬよき人
人敢　条孔奥　一梅　一喚
ひくておもきはこやいとむしそ御やと
（伝紫物語）大わさ別しておもきふかなかは世ハこゝへこそこそ紙風さうれ
流るよるせはゆうまりや
（日）当わ給ふ給もる尾かく結流ても

天川をわたるてふも
昼夜に五たひ天河を渡る間と今やうてよ
しるし舟ありつる海にさらしつゝも
是はりこゝにさくらかわ立振るなるもむつかしき経なり云く
紙かうてくもくのもとなる事わかりかとも思ひなりかや
らん山とてさゝとは佛の行ひさらにとこりまりや薬王亦と
ゆかれもさてのゆつりこ施せんかんとりや
若有人聞是薬王菩薩本事品能随喜讃善者是人現世
口中常出青蓮華香身毛孔中常出牛頭栴檀之香　法華経
鳥の音にさそひ出しゝたおとゝめく
並鳥の声をきくにもあちこち山の添さんと人はおもふらん
教ゆる人の身は我思ひ風のかよひしやうに海をもさて見給らんへ
次ゆる人の身わ心の中行く人ゆゑくにゆかりて袖の露

今はとて忘るゝ草の種をだに人の心にまかせずもがな
忘れ草も見えつれども
あさ茗は思ひそめしことはらうしきはなとも　早
おもひ実のしたにもわすれ草の種をまきて見よ絲
さらやうとにかへもなきくさり　篇
ひやうねのうてろよいれにめるから
屏風絵袋事とつてすれるゆゑや上古なる子細
雑花見ては又など申さる袖に
ちかりかりをうつさ人ゆく　物にそことまうてこふなる
みこうして
見るゝ風の粧ふうる也猶よ着教を思ひ侍るなり
かのなれとうおと海しりされ
たそよしこゝなり。ろよそと用卿の言也

かよのとうき　降魔相
えらじ月とも　鞍馬せ
松かせのあらしや風ふきもやすらく
洗髪後有風発　醫書云　沐エヌレ
左傳云　諱心沐謂僕人曰沐則心覆則圖反宜
然よりろさねして
通經辰　瞬メミシロク　不賓
あらすの事
いそうてたもなし事いとうろして心に
心ふ下にうつ咲ふりいそてたりなを浦られ
（伝導徳經）おりふすいふそ申まやみあへは秋とむらうふ人あまれ
家にあひてもわするやうすなふみゆうらこそ梅さへ
次程をすて此与定の秋ハあるでもあらなうられ

いかに咲ふしくらし仰せハよかしの根こそれ
いつものまうけとの浦鏡よくハ出かけるさんあ
中君の北まめもうし花ハ節はましさえらう
人まうけこそとわり
梅の紀山の陰ハさみさかよ仰ふくさは
操ミサオ　心操せんうろあり
かゝるつらう持てしなりしようハ宮かをてさこし
さや仰るゝ名あうすそたり久室あし流て仰かは
八文乃字舟君と秋子よゆうて諸ハさふしる也そ本くら
ならくたりたるりありしさとハ中君の母儀ご常盤成
左右ミロ　音コエ　万葉
いうしくま　書司く
妻と秋眠事也
り縁ご糸よいとなあれとこ

おくれはしと文のうちとし給へりける
うはらのこともありさ秋萩よりも露とくるも露る
又さのまうりしてまゐらせしに露もらとりてそあり御
見やさ野にをこ給ひの小萩露とをかこ風にも給にて我と姫
又さ野にを見りりしは文字にまゐる御かへしとてはみや
こみやのはことまうらせあかりけり　御子也
くらうしはなつ葉にて、
屋戸　宿　古人須此紀趣不須甚人作可見
あつかひ
世中にあつかひをえてし小年うちわらかからかへし
内とてくらて　迷　放埒
花うはうのくま　僧坊　奥　へ
あ路にそ帰りかくりけられ　雑　窟

あたこの山のまうしに峠よまうるはゐあつてもゐはおりしける
愛宕聖者空也上人事頭陀山縁起曰空也上人和泉
水寺発播州口念仏行何所乃ゐの慈悲をきかせよとい
ありゐかくわ續乃きむりあまそと称念せられけるに
飲ん参若狭の愛宕山月輪寺は是補陀落山同浄土
や魔界断跡唐なる所なりしおも頭陀所此行は一生の
有志趣乃頭山なりしも多年練行に恙後は洛中念仏
行を弘通し諸人を勧せられしに取意略抄
三代格僧正遍済空海大師に随ひて真言を傳愛宕にある
雄に十二年住　十九にして
人わたとまりを仰しめ給
衆生無邊誓願度
四弘誓願　衆生無邊誓願度　法門無量誓願学
四弘誓願の偈也
煩悩無盡誓願断　無上菩提誓願證

極めたることなり

守刀

わりたるさうし殿のこまくなどしての屋によなりられ侍らん

とはじめはいかはいかにわかさてあとはいなしくくし

ふりたるはいふらぬせ などいふは などや

饗熟（キヨウジユク） 漢語抄

いかめしき

伊賀部女 中媒事也 狐をいてはやいふ也 又云伊賀力女 釈云女狐をいふ 力女は狐也

弥文察部女 是狐事也

一説伊賀 伊賀國には白狐などあるゆゑ前にいふといふ

新撰字記云野干（キツネ）坂に伊賀専（タウメノ）婬婦

専 今俗呼老女為専 漢語抄

私にはとてんなる女の事にいふ

ふたつなきもの

牛飼 穢し 天皇行幸になりぬれば

夜行とこそいへ やかつこのとき行迷（崩）ひ あやし

こ法人のことくゝりて

秦始皇本記註曰西京賦曰徼道外周千廬内傅（傳）儲

士傳宮外白為廬舎晝則巡行非常夜則警備不虞也 天子

源順和歌 在夕刻巻に

釈行説には葉やう有何事ぞ

家持 家持（ヤカモチ）

家持字をやかもちといひや中納言家持などいへり

たかくらのおとこの舟のくりやのたきもとめ

伊勢物語にもえいへるの帰しあとをあつい

ら法人よりかおいなる 古今あいさへつきをを

みこと人 御たち人

以乃ころりゆハ京もわらすになくくらとさうてこゆ
（万）身くも物りくろ屋の命ぬおさ野らわたりに家もつかすよ
さしこむ蓬やまきさ葉乃わかれ横枕る為ろくさの非
四阿（アツマヤ）令　新儀式不能　阿屋（アツマヤ）又和名　四屋　同上　東屋　儀同上
庶令云　宮殿皆四阿　辨色立成云四阿　阿都　東夜　東屋（末夜）　雨下　両午
同令云　庶人門舎不得造一門　辨色立成云　両下麻夜
とおくくよ物ハ忠つと云かくしらつとく縄のゆー（ひ）とらよ
記さ流るもくとうち花てさ為さてかれ
杉ほんのれしりて
溺ぐれ
亦ほらきさの縁ほよおろさ終ハぬんらよ
東都書法詩見蓬情　知（スルヲ）車作（ヨ）在
蓬家乃車牖のまわきかくとよくふゆくもんそ車へ

と化称しくれ仍蓬とい車のよ以れ
丸称　立らの丸称の心れ
淮南子曰見教蓬将而知為車文
又曰右平御覧云　林蓬偶何華飄颻隨風轉將
蓬ハ車名也云く　松云　只蓬の乃なとの旅の丸称也
なら月ハおもよすせらぬとりこさうし
節分九月三日也
帰かし流きより　清雅寺也
まとをわかるの紙車のなうにふ為さてもれくし
車流中ニ引地として貴賤同車とう車乃り
たらしきのなくの紀也こうよ
みちわしき亦をいふへし

或云自言至伶車臨事也

むかし或宮女をみちのくへつかはしけり

我恋ハむかしさえよみおもし一夜金風にさそはるゝ

わられぬ紀逢やさもりくみる候なん　巨魂

ゐし詠婦りわり何しと　不用　ふ暑

ゐられしり流けにつふこしさりこともくおし行きん合ひ給

あられそりつま　あつまやのまやあまりれ　西そこよ

まれ佐とのまたへ　ちかとかをかとひと　庭に色行

こえもりをと　まれこ紙なしきていて　きませる

風むしは　催馬楽　東屋律

楚王ゝ浪ありいやしき表のこえれたもしはかりと

班女閨中秋扇色　楚王臺上夜琴声

事ここてあまちあや志くもうらいかはけれと

古今

山里ハ秋こそことにあれ世ぞさむかりきよるまり

東ゟ山里ハ秋に付たる事なることこそあれとらふ也

風より来ハ気ぬりめる秋哉なしむつけかゝるよめる月の旅

おん巻よりやより来と思つてもいと月いとなかめてつく紙

おりにつけてよめるなり

第三十七　浮舟

巻名

橘のこしまは色もかはらしをこのうき舟そゆくゑしられぬ

とのゝはゝすてゝし舟

ものゝふのいさよふ波にうき舟のたゝよふ[illegible]人の

秋霧はさしも[illegible]ものを

ゆふくれてとみよりかはるさゝ[illegible]秋のいろも[illegible]

清之物と　をてふくのなり

大夫乃北

大夫とのへとも也敷の字を[illegible]読也

うちにはよものこゝろせはうつり給はぬ[illegible]

きゝなし[illegible]

卯杖　槌

持統天皇三年正月乙卯朔丙寅國々に卯杖

大學寮獻杖八十枚

年中行事云正月上卯日卯杖事 東宮大舎人并衛府

卯杖内竪

以次春宮坊獻卯杖大舎人

次大舎人進卯杖六十束

次糸所進卯槌 女糸所或云可居机

其料糸卯槌入机組并縷震敷料十両二分 糸

結組料七両二分 丹波糸 已上結紙敷人取之結

付畫の瓶懸角柿剝之細木為柄槌末如尺八許

卯杖ハ椿木桃梅杖也或説云仁壽二年正月始之云

うつゑはうちにもさすらへにきえなて[illegible]柿なり

椒松　方言曰以東開樹枝用之　柿鵑二音 和名末太布利

かりうちひとをまよふ[illegible]

賭弓 正月十八日也 二年始て文傳博士ニ命して内宴ニて祝
の詩を作らしむ
清和天皇貞観二年正月十八日東宮幸豊楽院観
賭射内射の事
仁徳天皇十二年七月高麗国貢鐵楯鐵的八月集
群臣及百寮令射高麗所献之楯的諸人不能射
通唯祖有人宿祢射鐵的通焉時高麗客等見
畏其射之勝巧芸起以拜朝
天智天皇九年正月詔士大夫等大射宮門内
延喜二年三月廿二日同十七年三月廿日同廿二年
三月九日 延長四年三月六日有敕上賭弓之由見記
劔おしなれと くやむしさん也
みなたかれ紀の志るしにあらん 親隆
いにしへのためしなりけり人はみな神に詠
ことわりあれ清く何をかいはまし君がためこの人はみなかくれ
からぬ絵の事となん 絵事 物語の事也
のことはりなり
冬のあさきよきけしきなり日にも志るしあるなりこそ
ゆかしくあらましかはなにもかくれなき
絵事漢書藿光傳曰武帝心欲以焉嗣命大臣輔之
之察群臣唯光字子孟任大重可属社稷 師古曰任堪也属委也 任音壬属音之欲反
上迺使黄門畫者畫周公負成王朝諸侯以賜光 師古曰黄門之署職任親近以供天子百物在焉故亦有畫工
絵事後素 論語
こゝ絵かきてんとかの人なきにまさりつるこゝろこそ
せさせ給ふよしいへる 顔読 孫信の人 見説鈔

いかなる世の人にかさねてもあれはちらぬはなる秋と
こゝろをしづみて後ぬれんとこそなりけるその時よ
そらの月つれなし
古今
あさぢ袖の露のおもひや今はきえぬらん秋の夜のなかき
との夜くも月やみのらぬかな
志乃ぶればこゝろの色そとまらねはかなくもこそふるさと
ここかしこにさし大津のさとの　後者
ふかき月のかく
人のみ下行水のきくとはいまそしらぬ月のかげ
ゆふべらにの夕月夜なり
陰陽家に晦日月とて晦日月を用事ありとこそ
又其言にて金剛薩埵を晦合宿の月にたとへ給ふ
晦日月ありし朔日の月を分論秘説あり

倶舎云近日自陽覆故見月暗闕
又毎月一日月宿事月蔵経説
正月一日室二ゝ奎二ゝ胃三ゝ昴五ゝ参六ゝ鬼
七ゝ張八ゝ角九ゝ氐十心十一斗十二虚
ゆふさとさへれよくみそらのゆふべのこゝろを
蒼茫霧雨之霽初寒汀鷺立重畳煙嵐之
断処晩寺僧帰　閑賦　洪澹
あさぢよりそらの露るとみの古寺をあはれ晴れよ
ゆふべは淡く露わかれ色をみも色鳥とかざしさとふと
あり鳥鶴一行に物や秘る和漢のかぎりよりていふを
ゆふべ大路よりさそれ又海くさとある事
ありくべん用捨て在人心中
ありしにけりなり

いつとてもかれわかおもはれんわけによりて家もちの
闇とハあやなしといはゆ
春の夜の闇とハあやなし梅乃花
衣をかたしきこよひもやとおもひし給へるを
たとへ
こと遠よ衣りてきゝしに秋りや我を待らん橋姫
りと流人を　なく人　古人（モトツヒト）万葉
ありその（ほ）とりて
橘乃小嶋とかてハ舟志てしらぬゆかりを
古
今もかもさきにほふらん橘乃小嶋のさきの山吹の花
万葉ニハ橘嶋又小嶋又嶋乃宮ハ日並しの皇子尊の宮所也
皇子尊宮在所也云坂ハ河内国とありなを
続古今稲所也ハ大嶋橘小嶋山城国と注せり
よの名とりてもいふとくちかくさ給

たとへ
うち渡すをちかたの人ハさとをはなれて我君をまつ
あらよの（ね）ら　志人と
よるとむるをとのふ風りぬ人まて
あらて秋乃里乃川辺乃営りと秋作る海士のたつ
ちかひ
山ハかゝみをたてけるやうに見えて
たとへ
近江のやかゝみの山をたてたれハかねてそみゆる君かちとせハ
こはたの里よ馬ハあれと也
山城乃こはた乃里に馬ハあれとかちよりそくる君をおもへハ
あやしきふしありてわさとかちよりさたりと
なくし君よことをなくれてかへり（ゆ）く也
志いてことはりハ其のすこしに　不用也
いつかれよへよ（わ）よおもひなりてなるなりと
よみてもかくてもちなかの給あし（き）也

恨てもあれてもいつえんかくてあさかくにしんあり給ふらぞ
ねやのうちほとゝきすせ給ひよに花と
なつちるゆめやのかつこのまゝにこそあり
あらしふくゆふくれ哉
いはれぬ悪つらきにおもひ秋の夕暮の色はおもひ知る
おしつまるはときこえぬれと
釣舟乃流されゆく海つらはなれ行水のあはれなるは
流れくしとまるとも海辺のみやまなとん
うとくしよ宗中にそあひとらしまる南面は浪に風なる
何そふ知わかしとあかし
俺のまつは身まとられ草木祢をあして
盛なるうりことあると
白雲のなかくらの山の岩よしゆきふたあらん行のあらせよこそされ

志ら雲の峯にかゝる山よこもれまておもひしらるゝ
みなし川よみこさせまいり出すの紙
恋をしとしてみも川はせしこそれ
ぬきよのこゝろしとつゝるいぬちうしとも
見系乃久系太奴不乃ホ不尓和礼波安火利
止称也　人乃字志なる也　呂安大　路可せや　左ちな　去志右新也　乃只は
いかおもかうよふる風のあいんかもうし流ゆるくるん
波風よあいさよ名のる星宿よの花も此婦人よい行く
かの乃記は上らんあれはとられてうみのきれ
上官は政官也　左政官被官あり所也　上官とは殿宮を云事也
此者ハ何しあり　書司　対書司也
此文書れくわくハ　具　一色の人也
いみしきふてうの色ごとめてはいらはしらへ

不調　一類

うら紫の　内舎人

かゝるにこそあはたゝしく家を出るの中にはなを出

くやはあれとて

忠臣不事二君　貞女不更二夫　史記

ほしわたもさかりせられ侍りけるはよ　雑事也

さのこしさかしやうのこと　如形　恒常事也

梅かえのかみのあやをいしめをそへ

松かえしき山の集と云　世俗言なり

見かへりのうろうとかりく　当代官也

こちみうくまりるこれ

君よあらんをは見しそ松の末の若みとりたえぬなかとこそ

松蘿の契とよむ也　夫婦のむすひ也

むかしは市にゐけるか人のありさ海のうきこちさよる

ねねかる所をさへぬれぬめしをありぬれ

大和物語云　津国に住女あり　よはふ男二人

なむ一人はその国のうはらにすむ男姓はうはらになんいひ

いま一人は和泉の国の人姓はちぬとなむいひける　かくて

その男とも年齢かほかたち人のほとたゝおなしはかりなむ

ありけるいつれまさるといふへくもあらすふかきあはれをも

猶いかにせんとそ思ひわつらひぬふかきあはれもなき

ことを猶いかやうにせんとてそこはかとなくいひかゝ

をかしきを女思ひわつらひて人のなかをは見すしてい

猶よをくらしあつまりくれしに猶もおもほしくしに

家のうちにくらしてよくなしとこなせてなきこともお

そこにそれもこれもものおもひやうかとこに流れ

緑とこ袂なりとられなわりもぬらしてみやありてうつろひにし
ゝ年月とて人のゑきさとりつきとさはなく
たしかにうらくはあはれなる人のうつてもなんと云女ん
めとはなんうとも人柔はされなれあつめ見んと
はしかぬうさいひてとよきこしうちともいろさはのつらく
いでかかりけるこゝろてなかりなかりれこれよりはかな
人をとうおにたをみてもやのいやうこぬゆさす絶もれ
きんうのをとかくはるはいつはあれしく云ひさうさらん
あらたどはさゆしゃはよそともほいろうくなみう船
つまはさうつつ花いとくたしこうすありといふ時よ
うらごう絹にて我がゆなやかなるよ云ふ云ふをと川よ
うちてこの鳥とはあはれなはなしておはん人れ
津と云ふよいとられすなりといひかは一人

百八 人は尾のかさと流るゝなかとよは流速といふふくてあれ
おおりなまむしく女
信濃の稀なるをさてんは風のて田代の岩よこそ流れ
とよみあうこほなりは川よのりうくもうちもつふ
こゝろ入あまりやあはれてゝくれうもうをかこ
たゝふ人のかゝる屋そあはれ所よおうらかへ
百九 昔の篠田男の妻とうりすゝい女のそばかつてそらね
うすむかうめいはすけし女せは男はなるい二人の男也
おはかゝなさうと云也 おほきは鳥也つきは薑也 いさのつくなき
そうしおとうかえおほこと絹 ひとそうえこゝろあり
むかしさらくあて 夏古
こうゐいの大よ 恍臺
おやさをあさうすを家人のいとはこゝぬるくおうもたとあて

わやよされら不孝ん一すりとのへり
むすしさ見よみちめらくらし候へく
秋医ハむすしさ見よみあ見下にはや世ゑて候うまに
いさ心ニすあり　いさらふ　辛
仰とハあうこ取しそ大ととつくうそれ下しおを
大吹村背肩蟬鳴織婦蛇　白氏文集
守家一太迎人太放野群牛下横休
山乃川乃ろる之のみを語むしくてのをよむりくきしつみあを寄て
武本ありとつみ物をこらし
彳膳　次障
そこりさわとみみりくこうつろかむりろさるそ金をむ　け君へてう
むこみ梅しかり　云胡
わをそくハ河乃る紙ちやつちつ忘ふつ木あこらわを積のこ哉そ

鳴そてハ蝶ちゆうち鳴くしうらハうちあれりこゑまさりし
歩ゝ近死地人命亦如是　経文
屠所羊歩の事唐土ニハ羊を牧畜て食肉ニ用ゐて
屠所へおくして行て殺世歩ゝちかつ死地よ近
行ゝ是を云常よ喩也
かつきさよ浮世中にこて然とも何つことをえかと君ようらうん
宛蝶ハうとらん行ゝとをすくさみ
後撰十六哀傷
あるとも来ちまれ物を哀なれていねことをえかと君つこハまし
知う秋して何ゐ哀よ人のいむこい事なんみて始れせく
解夢書曰　夢見病人死　必死
かれとあやまつてみくらしつをれとかうる
人ハおかんつさのあれよハ忘けとさこて胸をうつし火よくやけ　小町
ふうしつもとはいむなちて我同る也

漢書　高記下　曰上欲宿心動